

【今週の注目疾患】

【咽頭結膜熱】

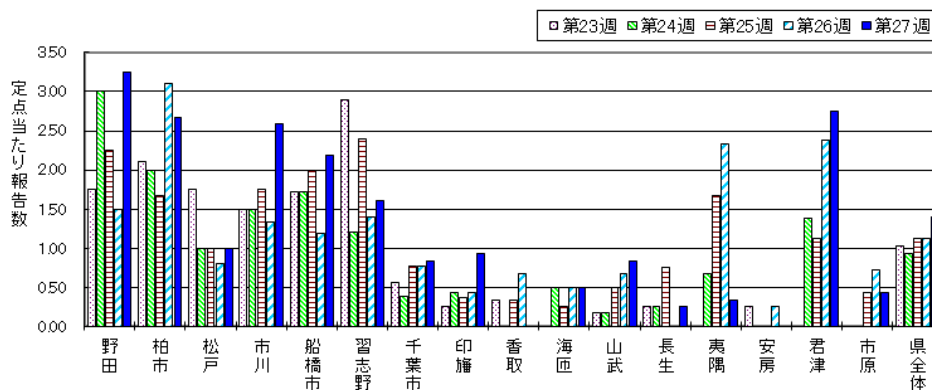
咽頭結膜熱 (pharyngoconjunctival fever, PCF) は発熱、咽頭炎、眼症状を主とする小児の急性ウイルス性感染症である。咽頭結膜熱の報告は5、6月頃から徐々に増加しはじめ、7月前後にピークを形成することが多い。また冬季にも夏季ほどではないが報告数の増加を認める。2017年は全国的にも咽頭結膜熱の報告が多くなっており、県内においても定点医療機関 (小児科定点医療機関) から報告される咽頭結膜熱は第27週に定点当たり1.39人となり、報告数が多い状態で推移している。定点当たり報告数の多い上位3保健所は野田保健所 (3.25人)、君津保健所 (2.75人)、柏市保健所 (2.67人) であった (図1)。過去、2006年と2011年にも本年と同様に定点当たり報告数が1.00人を超える週を認め、それぞれの年のピークは2006年は第30週 (定点当たり1.50人)、2011年は第28週 (定点当たり1.52人) であった (図2)。2017年第1～27週に報告された患者について、年齢は1歳が最も多く (26.6%)、次いで3歳 (14.0%)、2歳 (13.8%) であり、性別は男性が56.8%とやや多かった (図3)。

咽頭結膜熱の感染経路は、通常飛沫感染、あるいは手指を介した接触感染であり、結膜あるいは上気道からの感染である。プールを介した場合には、汚染した水から結膜への直接侵入と考えられている。特異的治療法はなく、対症療法が中心となる。眼症状が強い場合には、眼科的治療が必要になることもある。

予防としては、感染者との密接な接触を避けること、流行時にうがいや手指の消毒を励行することなどである。消毒法に関しては、逆性石鹼、イソプロパノールには抵抗性なので注意を要する。

例年、第30週前後に報告は減少を示すようになるが、今後も動向に注意が必要である。

図1:2017年第23～27週に県内定点医療機関から報告された咽頭結膜熱の定点当たり報告数;保健所別



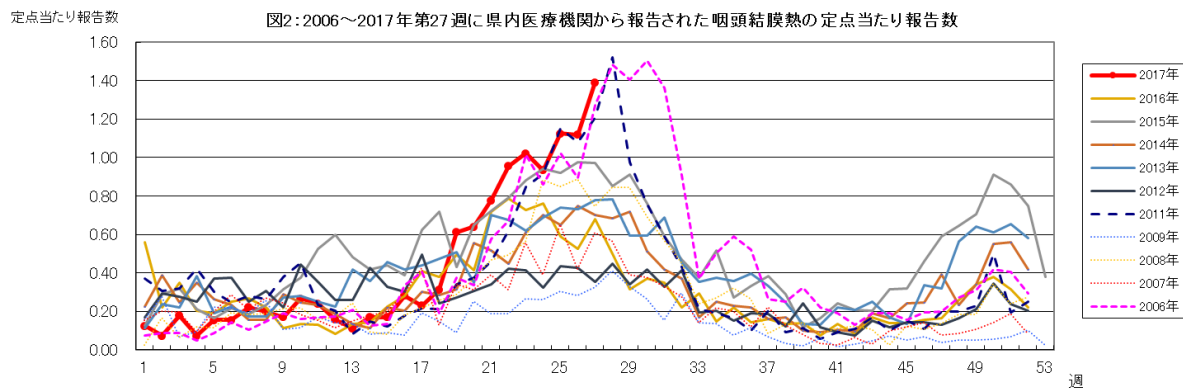
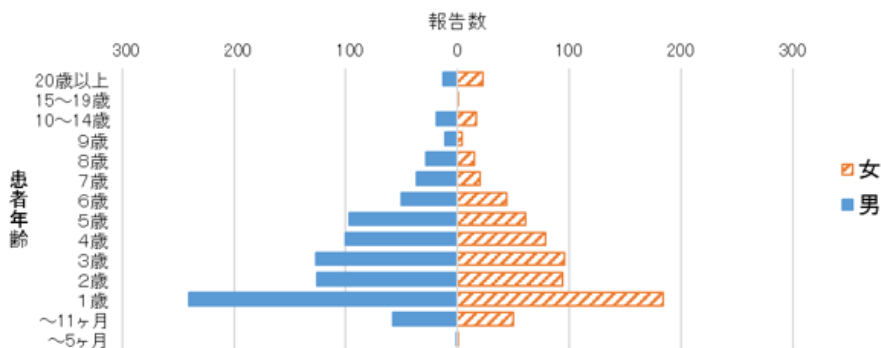


図3: 2017年第1～27週に県内定点医療機関から報告された咽頭結膜熱の患者年齢の分布



参考・引用

国立感染症研究所 咽頭結膜熱とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/a/adenopfc/392-encyclopedia/323-pcf-intro.html>

国立感染症研究所 感染症発生動向調査 週報 (IDWR)

トップページ ; <https://www.niid.go.jp/niid/ja/idwr.html>